お試し小説

姉川春翠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちょっと試作品をここに置いています。読者様にとってもお試しでありますし、私にとってもお試しな感じです。

色々な作品を置くため、警告タグが付けづらいですｗ

目次

眺望 ―― 1
邂逅の輪廻 ―― 17

眺望

夏の朝日が射し、十時を過ぎた頃。

秋葉原駅周辺には観光客やサラリーマン、メイド喫茶の宣伝のためにビラを配るメイドのコスプレをした若者等、多種多様な人間で溢れ帰り賑わっていた。ここ秋葉の街ではごく当たり前の光景だ。

その中に一つ、高くそびえ立つ高級マンションがあった。まだ真新しいその外見は、見上げれば首を痛めてしまいそうな程だ。最上からの眺めはさぞ爽快であろう。

その十五階中央に位置する一室から、一人の女性がコーヒー片手に街を俯瞰していた。

薄く茶色に染まった長い髪の毛。白く透き通った滑らかな肌。美しく整った目鼻口。まるで人形のように優美なその容姿は、そうお目には掛かれないものであろう。

明眸皓歯なこの女性の名は、小鳥遊（たかなし）美璃花（みりか）。高級マンションに住んでいる事からも察せる通り、相当の金持ちである。このご時世では珍しく、一人だけ使用人を雇っているほどだ。

そんな彼女が秋葉の街に暮らしてから、本日をもって丁度二年の月日が経っていた。部屋から見下ろす景観も見慣れたもので、どこに何があるのかわかってしまうほどだ。

だというのに、美璃花は飽きもせず、毎日のように街を眺めていた。今日も同じように外を綺麗な瞳で眺めている。

「お嬢様、出発の準備が整いました」

すると、一人の女性が荷物を持ち、部屋に入ってきた。

艶のある黒髪を持ち、美璃花に負けず劣らずの容姿。使用人であり同居人であり、親友でもある不思議な関係にあるこの女性の名を、鷹野（たかの）　友佐（ゆさ）と言った。

「友佐、ありがとう」

「いえ、これが私の仕事ですから」

荷物をソファーの上に置くと、壁に掛けられた時計を確認する。時刻は十時半を回っている。

「お時間はまだよろしいのですか？」

「ええ、どうせ愚痴を聞くだけだもの。それに時間を指定してこなかったし」

美璃花の今日の予定は、数々の相談を持ち掛けてくる、腐れ縁のような人物と銀座で会うことだ。

銀座までは電車を使うつもりでいるため、手間は少しばかり掛かるが、時間はあまり

掛からない。
何より相手がいつもの集合場所に何時に現れるのかわからない以上、真夏の日差しの中を動く気にはなれなかった。
そんな心中を察した友佐は、何も聞くことなく部屋の片隅で、外を眺める美璃花を観察するかの如く見つめた。
が、ふと口を開いた。
「お嬢様は何故、毎日外を眺めているのですか?」
友佐の問いに、美璃花は暫し黙した。
彼女は一体何を見据えているのか。ふと気になっていたことを、友佐は問いかけてみる。
「好きだからよ、ここから眺める景色が」
ごくごく平凡な答えだった。
だが長い付き合いの友佐は、その平凡な答えの中に深みがあることを感じ取っていた。故に問う。「何故、好きなのですか」と。
すぐに返答はなかった。
暫し考えるように口元に手を当てると、漸く美璃花は開口した。
「そうね、例えばあなたは何故私に仕えてくれているのかしら?」

「それは勿論、お嬢様と一緒にいる時間が好きだからですが」
「それと一緒よ。私も、この景色を眺めている時間が好きなのよ。それ以外に理由を求められても困るわ」
なるほど。確かに、自分も何故一緒にいる時間が好きなのか問われれば、楽しいからだとか、そういう漠然としたことしか思いつかない。
友佐は少し納得した。
反面、納得のいかない部分もあった。目の前の支配人は、自分とは別の何かを見ている。同じ景色を見ても、それぞれが違う物を視界に入れ、感じるように。
それがなんなのか、友佐は知りたい気持ちに駆られた。
と、その時だった。美璃花の携帯の着信メロディが鳴り響いた。
友佐は慌ててソファーの荷物を漁ると、呼び出しの鳴っている携帯電話を美璃花に渡した。
「はい、もしも――」
通話ボタンを押し、スピーカーに耳を当てた瞬間、奥から怒鳴る声がこれでもかと響いてきた。そのボリュームに思わず耳を離す美璃花。
「ちょっと、怒鳴ることないでしょう？そもそもあなたが時間指定しないのが悪いんじゃない。え？　今から新宿に来い？　別にいいけど、少し時間掛かるわよ？」

そんな内容の通話に聞き耳を立てながら、友佐は先ほど美璃花が眺めていた景色を見る。何の変哲もない、いつもの秋葉の景色。それ以上でもそれ以下でもない。

「はいはい、わかったわよ。聞いてあげるし奢ってもあげるから、店の前で待ってなさい」

そう言って電話を切ると、美璃花は深いため息を吐いた。

「全く、いつもと違う場所を指定するは怒鳴りつけるは、ホントやりたい放題ねあいつ」

「それだけストレスが溜まっているのですよ。以前お会いした時、お嬢様には頭が上がらないと仰ってました」

「……一体どの口が言うのだか」

コーヒーを飲み干すと、呆れた表情で美璃花はソファーの荷物を手に持った。

「あ、駅までお持ちします」

「そう? ありがとう」

「……いえ」

美璃花は洗面所の鏡に向かうと、素早く歯が綺麗かを確認。次に髪の毛を整える。

その間、友佐は美璃花の荷物を手に玄関で靴を履く。そして美璃花の靴だけが入った棚の戸を開いた。

「さ、行きましょうか」

「今日はどの靴に致しますか？」
「そうね……友佐が決めて頂戴」
　そう言われ、友佐は美璃花の服装をまじまじと見た。
　胸の辺りに薄い黒字で大きく「ｅｎｊｏｙ」と書かれた薄手の白いＴシャツ。その上に白のパーカーを羽織り、下にはまだら模様灰色のミニスカート。靴下は履かず、素足のままだ。
「……そうですね」
　友佐は考える。今彼女が着ている服にぴったりな物はなんであろうかと。
「これなんてどうでしょう？」
　そう言って取り出したのは、黒の厚底サンダルであった。
「どうしてそれなの？」
「今の服装に丁度よいかと」
「ふーん……ちなみに私は青のスニーカーがいいかなと思っていたわ」
　笑って言うと、美璃花は友佐が出した黒いサンダルを履いた。
　マンションを出た美璃花と友佐の二人は、秋葉の街を歩き駅に向かっていた。美璃花が前を歩き、友佐はその数歩後ろを歩く。
　時刻は十一時を過ぎていた。もうすぐお昼時というのもあってか、周囲は町を眺めて

いた時よりも人混みで一杯だ。
「……友佐、暑いのだけど」
「夏ですからね」
「……なんであなた、そんな涼しそうな顔しているのかしら？」
「私ですからね」
外に出るとすぐ感じたのは、茹だるような暑さであった。
天気予報によると、今日の最高気温は３０度くらいになるらしい。のだが、人混みのせいで、それ以上の熱気を肌が感じている。
まだ外に出て間もないというのに、美璃花の額にはすでに、薄らと汗が付着していた。
「まったく、何でこんな暑い日に行かなきゃいけないのかしらね」
「別に断ることも出来たでしょうに」
「まあ、そうなのだけど」
呟き、ふと美璃花は立ち止まった。
それを不思議に、首を傾げる友佐。
「どうかしましたか？」
答えはすぐには返って来なかった。
立ち止まり、周囲をゆっくりと見渡す。その双眸は、どこか懐かしさを感じているよ

うにも見える。
「お嬢様?」
　二度目の問いかけで、美璃花は反応した。
「ごめんなさい。ちょっと昔のこと思い出したの」
「昔のことですか?」
「ええ、とっても昔のこと」
　そう言って微笑を溢すと、美璃花は再び歩きだした。
　呆気に取られていた友佐は慌てて追いかけると、隣を歩き始める。
「気になるのかしら?」
　美璃花の問いに、友佐は無言で頷いた。
「……わかったわ。そうね、今私たちが歩いているここが、昔は電気街だったことは知っているでしょ?」
「はい、当時の風景を直接目にしたことはありませんが」
「私も直接見たことはないわ。でも、写真を見たことはあるの。父が撮ってきた写真を」
　そこで友佐は理解した。先ほど立ち止まったのはきっと、その写真の風景を思い出したのだろうと。
「全然違った風景をしていたわ。ビラを配るメイド服の姿も、同人関連のお店も、ビルの

窓に大きく貼られたアニメの広告も、今の風景にある当たり前の物が何一つなかったわ。代わりにあったのは、コンピュータの基盤とか、今の時代の人があまり手にしないような物ばかり」

美璃花の話を横で聞きながら、友佐は当時の風景を思い浮かべてみた。

そこに広がったのは全く別の風景だった。これまでに見たことのない景色が、想像の中に転写された。

「部屋の中で聞いたわよね?どうして街を眺めているのかって。あそこから見ているとき、つい考えてしまうのよ、いつも。今私が見ている風景を他人が見たら、一体どう感じるんだろうって。そして今も考えている。昔の風景を知る人が、今の街を見たらどう思うのだろうって」

美璃花は再び立ち止まると、手をかざして空を見上げた。雲一つない、快晴の空模様。しかし、この空も自分以外の人間が見たら、きっと違う風に写るのだろうと、そう彼女は感じている。

「同じ人間でも、人が違えば見方も違うわ。例え同じ見方をしているように思えても、どこかに必ず違いがある。全く同じ見方をしている人なんて、全人類を探しても見つかることなんてない」

「……そうですね」

友佐はふと、美璃花が見ていた景色を眺めた時を思い出した。特に何かを感じることがなかった一方で、美璃花は何かを感じていた。

それがわからない自分は、まだ彼女との距離を縮めることが出来ていないのだと、友佐は思っていた。

「それが当たり前なのよ。人が違えば見方も違うのだから、完全に相手のことを理解することなんて不可能だわ。その結果、人と人との間に見えない壁が生まれるの。どう足掻いても消すことの出来ない壁が」

「……壁、ですか」

そう、不可能なのだ。小鳥遊　美璃花のことを真に理解することなど。

友佐は悔しい気持ちになった。と同時に、もっと知りたいという欲求が現れた。

「では、お嬢様はどうしているのですか？　普段お嬢様は、人と接する時どのようなことを考えているのですか？」

「私はそうね。出来るだけ相手に近づけようとしているわ」

「近づける……ですか？」

ええ、と言うと、美璃花は語り始めた。

「最初は勿論、自分の思ったことを口に出したりしている。でもその後の相手の意見で、相手がどう思ったのかを考えているわ。そうやって出来るだけ相手に近づくの」

でも、

「近づくだけじゃ駄目よ。時には相手と距離を置くこともする。そうやって一定の距離を保つの。例えばそうね」

そう言うと、美璃花は道行く車を指さした。

「ほら、あの車を見てみなさい？前の車が遅いからといって、車間距離を縮めているわ。あれじゃ、前がもし急ブレーキを掛けたときには事故になるかもしれない。時には相手に合わせることも重要なのよ」

確かに、美璃花の言うとおりだ。

自分の行動や思想だけを押しつければ、人と人はぶつかり合ってしまう。中にはそうならない者もいるが、その場合はどちらか一方にストレスが溜まる。

その結果溜まったストレスを発散すべくあらぬ事をする輩も現れるという、負の連鎖が起こってしまうのだ。

友佐はそう思うと、悲しくなった。

「人の心って、車に似ていると思わない？車という〝物〟を知っていても、それを操っている〝者〟のことは知らない。人の心も、表面を知ることが出来ても、その奥底は知ることは出来ないもの」

「そうですね。そう言われると似ているかもしれません。ですが、人は車と違って近づ

かないといけない時があるのでは？　相手と一定の距離を保つだけでは、何も変わらないと思うのですが」

友佐の発言に、美璃花は微笑んだ。

「そう、その通りよ。それでは何も変わらないわ。その人との関係も何も。だからこそ考えるのよ。如何にして、相手との見えない壁を壊そうとするのか、その方法を」

そこまで言うと、美璃花は友佐に笑い掛けた。何かを期待するかのような眼差しで。

「あなたなりの方法を探しなさい。私のやり方はただ怯えて諦めているだけの方法。だけど、あなたならきっと誰かの心の壁を壊すことが出来る、その方法を見つけられる」

「……お嬢様、ですが私は」

何かを言おうとして、友佐は止まった。「自分はあなたのことを理解できていない」などと、口が裂けても言えなかったからだ。

と、その時、美璃花の携帯が鳴った。鞄から取り出すと、着信相手は先刻電話を掛けてきた彼女の友人だ。

美璃花は「やば」と思わず声を漏らした。

鳴り止まない着信音。恐る恐る通話のボタンを押し耳に当てた。

「もしも――」

言い切るよりも早く、先ほどよりも強い怒鳴り声が、美璃花の耳に飛んできた。

「ごめん。地下鉄が意外と混んでるのよ」
　勿論嘘である。
「ええ、そう、うん」
「あの、お嬢様。お時間がないのでしたら車でお送り致しましょうか？」
「それには及ばないわ。あ、こっちの話よ。わかったから、ちゃんと奢ってあげるから適当に頼んで食べてなさい。もうすぐ電車に乗るから。ええ、それじゃあ」
　電話を切ると、美璃花は大きなため息を吐いた。どうやらなんとか相手を宥めることが出来たらしい。
「いい？　距離を間違えるとこうなるから」
「すみません、私のせいで」
「別にあなたのせいじゃないわ。ほら、急ぎましょう。これじゃ、夜になるまで愚痴を聞くことになりそうだから」
「……そうですね。あの方ならやりかねません」
　このとき友佐は、「ちなみにあなたには心を開いているのよ」と美璃花が言っていたことには気がついていなかった。
　駅には走れば五分もせずに辿りついた。
　急ぎ足で切符を借り、山手線のホームに下りる。これに乗れば、銀座までとは違い乗

り換えをせずに済む。それだけは救いのような気がする。この時、美璃花の体は、走ったせいで汗だくになっていた。

「……着替えたい」

　汗のせいで少し透けて見える服。如何にもな状態に、美璃花は決まりの悪い表情をした。

「大丈夫です。そのお姿なら男どもも悩殺ですわお嬢様」

「どこが大丈夫なのよ。あとなんであなたはそんなに涼しそうな顔しているのよ。汗も掻いてないし」

「私はお嬢様と違って体力がありますから」

　悪びれもなく、さも当たり前のように言った。それを聞いた美璃花は、余計に居心地の悪い気分になった。

「どこかジムにでも通おうかしら」

「あ、電車が来ましたよ」

　友佐の言う通り、電車が左の方からやってきた。待っている人の目の前に扉が来るよう停車し、メロディとともにドアが開いた。

「こちら、荷物です。お気をつけて」

「ありがとう。留守はお願いね？」

「はい。是非楽しんできて下さい」
「あんまり楽しめそうではないけどね」
そう苦笑すると、美璃花は電車に乗った。席に座ったのと同時に、扉が閉まる。
「あ、そうだ」
ふと思い出したように携帯を取り出すと、ＳＮＳサービス「ＬＩＮＥ」を開き、なにやら書き込みを始めた。「よし」と彼女が呟いた時、電車はすでに発車し、友佐の姿が見えなくなっていた。
一方で、美璃花の乗る電車を見送った友佐は、帰路に着いていた。
丁度駅の出口に差し掛かった時、ふと彼女のスマートフォンの着信通知が鳴る。
なんだろうと首を傾げながら画面を点けると、美璃花からのショートメールの通知があった。
開いて見ると、内容は「今日はあなたと暮らすことになって丁度二年目だから、二人でお祝いでもしましょう」というもの。その後ろには、彼女があまり付けることのないハートマークがある。
「これは、腕を振るわないといけませんね」
笑うと、友佐は駅から出た。
外に出た友佐は、なんとなく手をかざして空を見上げる。

雲一つない快晴の空。何の変哲もない、ただの青空だ。
だがこの時友佐は、美璃花が見ていたものと全く同じ空を見ていた。

邂逅の輪廻

今日は娘の誕生日だ。同時に妻の誕生日でもあり、命日でもあり、彼女と初めて出会った日でもある。

妻がこの世を去ってから、もう十九年が経った。十八歳、いや今日で十九歳となった娘ももうすっかり大きくなり、子育て出来るのか心配であった私としては一安心している。顔は妻と、瓜二つだ。

妻の命日ともあり、私と娘は朝から墓参りに出掛けた。墓の前で手を合わす度、私は思う。娘は一体、どんな気持ちなのだろうかと。自分が生まれた日が、母親の命日というのはどんな気持ちなのだろうかと。毎年考え、そして毎年その答えは返ってくる。

娘は今日も泣いていた。大粒の涙を流して「ごめんなさい、ごめんなさい」と繰り返していた。普段は明るく眩しい笑顔を見せる娘の顔は、ぐしゃぐしゃに崩れていた。

そんな娘を宥めるため、今日も私は誕生日プレゼントを渡した。いつもは服やバッグなどを買ってやっているが、この日に限って何故私はあれを渡したのか、未だに分からない。あれを渡さなければ、娘は泣き叫ぶことも無かっただろうに。

最近、やたら胸が苦しい。娘に母親がいない心苦しさからか、時折締め付けられる様

な痛みを感じる。今日もその痛みを感じた。きっと妻と同じ顔をした娘が泣くのが、心に響いたのだろう。

すまない、私の娘。すまない、私の可愛い未来（みらい）。

【赤坂輪の手記　２０４４年１２月２５日より】

◇

２０１５年１２月２５日。この日も日本中はすっかりクリスマスムードになっていた。

赤坂輪の住む町も、そこら中にクリスマスの装飾が散りばめられ、賑わいを見せている。木に掛けられたイルミネーションは、夜になるとさぞ綺麗なことだろう。

だが赤坂輪にとって、クリスマスとは忌むべき存在であった。勿論幼き頃は心踊り、毎年来るその日を待ち侘びていた。二十歳にもなってしまった今では、その姿は影一つすら無かった。

高校生以降、彼はクリスマスとは普段以上に孤独な日と認識している。というのも、彼には愛する人間というものが存在しないのだ。それは生みの両親ですら、例外ではない。「人の輪の中心にいてほしい」という願いから付けられた名前とは裏腹に、赤坂輪は

気付けば孤独に生きるようになっていた。

一方で赤坂輪は、孤独が好きというわけではなかった。現在大学に通っているのも、心の隙間を埋めるが為の事だ。異性との関係を持ちたいとも思っている。何より、孤独であることがこの世の何よりも忌み嫌っていた。

そんな彼は、むしろ「人の輪の中心に」という願いの通りに生きていてもおかしくはなかった。顔立ちも良く、身長が高い上に体が引き締まっている。勉強も出来、スポーツも万能。率先はしないが、いざ頼られればリーダーシップも取れた。高校生の頃には、「学校のマドンナ」と呼ばれていた女性からも告白される程に、人気が高かった。

だというのに、何故この男は孤独を感じているのだろうか。それは彼の心中で"運命"を信じているからに他ならなかった。

別に彼は、自分が運命に選ばれた崇高な人間だと思っているわけではない。ただ、それ以外に心の空白の理由が説明が出来ないと考えていた。

例えどんな巡り合わせがあろうとも、彼の心は何も感じなかった。学校で一際美人の女子に告白されても、気の利く友人に会っても、教師から天才だと称賛されても、心の空白が埋まることは無かった。両親から誇りだと言われようとも、自分を変えようと努力しても、変わることは無かった。

現在彼が街に赴いているのも、一種の運命でも感じないかと考えての行動だった。

時折立ち止まり、周囲を見渡す。老若男女問わず、多くの人が彼を気にも止めず素通りしていく。

もしこの中に運命の相手がいるのなら、同じように立ち止まって声を掛けてくれるのだろうか。そんな夢に耽る一方で、現実は誰も彼に話し掛けることは無かった。

大きなため息を吐き、再び歩き出す。暇を持て余した右手が、ポケットの中のスマートフォンの電源を、入れたり切ったりしている。

今日もきっと、このまま何事もなく一日が過ぎ去って行くのだろう。そう思うと赤坂輪は、刺激のない平穏な日常に飽き飽きしていた。

つまらない――そんな気持ちが、彼の胸に渦巻く。

その時ふと、カチャリという音が彼の耳に入ってきた。どうやら他の者は気づいていないらしく、誰も立ち止まったりはしない。

何だろうか。そう思い、周囲を見渡した。音の感じからするに、何かが地面に落ちたのだろう。

そして見つけたのは、ハート型のロケットペンダントだった。

誰かに踏まれないよう、素早くそれを拾い上げる。綺麗な装飾と光沢は、女性でなくとも魅入ってしまいそうだ。

ペンダントを見ていると、彼は不思議な感覚に囚われた。まるで、このペンダントを

拾うことが、決められていたかの様な感覚だ。
「あの、すいません！」
これまでにない感覚に首を傾げていると、透き通った綺麗な声が響き渡った。周りが人で騒ついているにも関わらず、その声だけははっきりと、赤坂輪の耳に届いていた。
声に振り向くと、一人の少女がいた。長く艶のある黒髪と、雪のような白い素肌。愛嬌のある顔。赤を基調とした服を纏う体は華奢で細く、まるで人形がそこに立っているかのように容姿全てが整っていた。
赤坂輪は思わず見惚れた。これまで見たことのない美貌に。いや、違う。美なんて感じ方は人それぞれだ。言うなればそう、彼は生まれて初めての感覚に戦慄したのだ。
「そのペンダント、私の物なんです。落としちゃって」
少女は今にも泣きそうな表情で言った。この様子を見るに、とても大事な物なのだと、輪は察した。
無言で差し出すと、少女の表情は一転して歓喜を溢れさせた。
「あの、ありがとうございます！」
「ああ、いや、たまたま拾っただけだから」
少女に見惚れ中々声を発せずにいた輪は、漸く閉ざした口を開いた。
「いえ、本当に。これ、すごく大事な物で」

声を掛けた時の顔でそれは分かっていた。なんてことは言わずに、輪は苦笑する。
「あの！　名前を教えてくれませんか？」
突然の切り出しに、輪は驚く。たかが落し物を拾っただけで、名前を教えてくれと言われる物なのだろうか。
「えーと、赤坂輪」
なんと答えれば分からず、気がつけば名前を口にしていた。
再び輪に不思議な感覚が付き纏う。まるでこうなることが決まっていたかのような感覚が。
――何なんだ、一体。まさか本当に運命という物が存在するのか？
そんな疑問を抱えながら、ふと少女の顔を見た。少女は驚いて口を大きく開いたまま、微動だにしない。瞳を揺らし、信じられないと訴えているようにも思える。
「……どうかしましたか？」
少しぎこちない敬語で尋ねると、少女はハッとして輪の顔を眺めた。
「す、すごい偶然もあるもんなんだなぁって」
「すごい偶然？」
「はい。私の名字も、赤坂なんですよ」
すると、輪もまた驚いて少女を凝視した。同じ名字、親戚でもないのにそんな偶然あ

るのだろうか。

「私の名前は、赤坂みくって言います」

この時の少女みくの微笑みは、後の輪にとって、一生涯忘れられない物になっていた。

◇

思えばあの日出会った時点で、私はみくと結ばれる運命だったのかもしれない。

初めはただの偶然で出会い、その流れで友人となり、度々会っていただけだった。それが後に彼女から両親がいないと明かされ、一人暮らしの彼女を自分の住むアパートに泊めるまでに親しくなって行った。

そうして付き合うこと一年、遂に私はみくに対する思いを告げた。彼女は初めは戸惑っているようだったが、私の告白への答えは甘い口付けという形で帰って来た。

それからは毎日のように彼女と一緒に過ごした。大学を卒業した後も一緒の会社に就職した。毎日が、思い出だった。

程なくして、私はみくと結婚した。元々同棲生活していたが、みくが子供を産みたいという思いを持っていたことから、有る程度の収入が入るまで式を上げていなかった。

結婚してすぐ、彼女は子供を妊った。

彼女は女の子が産まれると知り、すぐに名前を決めようと言った。明るい未来を歩んで欲しいという彼女の願いから、娘の名前は未来（みらい）に決まった。

これからきっと三人で幸せに暮らすのだろう。そう思っていた。

だが、彼女は娘を産んですぐに他界してしまった。出産時の、出血多量のためらしかった。

私はしばらく塞ぎ込んだ。娘を両親に任せ、家に引き篭もること数ヶ月、私は彼女のふとした言葉を思い出した。彼女は「もし私が死んでも、この子を育ててあげて」と。

もしかしたら彼女は、自分の死を予期していたのかもしれない。何故かは知らないが、私も、こうなる運命だったのだと思った。

それから時が経ち、娘は十九歳になった。今見てみても、まるで生き写しのように妻に似ている。何度か、抱き締めてその唇を奪いたいという恐ろしい衝動に駆られたが、私は彼女の父だ。恋人ではない。きっとこの先、娘にも愛する者が現れる。娘はその者に捧げたいと思っているはずだ。私や、妻がそうであったように。

それにしても最近、どうも胸が苦しい。原因は不明だが、時折目眩もする。医師に診断してもらったが、異常が無いというのだから不思議だ。

だが私には何と無く分かる。きっと私は、もうすぐ妻の元へ旅立つのだ。そんな運命なのだ。

娘がもうすぐ成人するというのに、一向に独り立ちしない。何故か聞いたら、なんでも私と離れたくないらしい。

それは嬉しいことだが、何時迄もこのままではいけない。
だが、娘の独り立ちのきっかけが、私の死というのはあまりに酷ではないか。
それでは娘が、一人になってしまうではないか。
そう思っていても、きっと私の死は変えられない。そんな気がする。だからこそ、私は、この日記の最後に言葉を送る。
ああ、娘よ。私の愛する娘未来よ。どうか、私が死んでも、めげずに前へ進んで欲しい。明るい未来へと歩んでほしいという、私達の願いのためにも。きっとお前にも、私と同じように、素晴らしい出会いが待っているのだから。
【赤坂輪の手記　２０４５年１２月１９日より】

◇

墓の前で、未来は日記を閉じた。
彼女の父・赤坂輪は、日記の最後の日付の翌朝に亡くなっていた。原因は不明。突然の心臓麻痺という診断が出された。
葬儀はすぐに執り行われた。輪が前以て葬儀場を用意していたのだ。
未来の後見人も、すでに決まっていた。輪が絶対の信頼を寄せていた友人夫婦だ。未

来もその夫婦によくお世話になっていたため、信頼している。
だが彼女は、二人と暮らすつもりはなかった。彼女はもう二十歳になる。ならば独り立ちしなければならない、そう考えているからだ。
それだけでなく、彼女は本当の父以外を父親とは思いたくなかった。
幸いにも、残してくれた財産は多かった。
これもきっと、父が死を見越していたからだろう。しばらくはこの財産に頼ってしまう。でもいつか、自分だけで錐揉み出来たらいいなと、未来は思った。
「お父さんから貰った、お母さんのペンダント……大切にするね」
二人の思いが詰まった名前とペンダントを胸に、少女は〝未来〟を歩む。二人の願い、明るい未来を。
帰り道、未来は違和感を感じた。今歩いている場所が、自分の知らない世界のような、不思議な感覚。
思わず立ち止まり周囲を見渡す。
ここは自分の暮らす町のはず。そう思っていた矢先、未来は思い出す。
自分が立っている場所が、本来なら墓地から遠く離れているはずの所だと。
未来は偶然足元に落ちていた新聞を手に取った。
――少女の目が、大きく開いた。